

# ある平和主義者の死

—シーヒー・スケフィンソン夫妻と1910年代の 아일랜드

小村 志保<sup>1</sup>

フランシス・シーヒー・スケフィンソン (Francis Sheehy Skeffington, 1878-1916) を語る時には多くの単語が必要だ。肉食主義者、絶対的禁酒者、嫌煙者、生体解剖反対論者、女性解放論者、女性参政権賛成論者、社会主義者、急進派、無神論者、アイルランドナショナリスト<sup>2</sup>、そして絶対的に非暴力を貫く平和主義者。イギリスからの独立を求めて1916年にアイルランドで起きたイースター蜂起 (Easter Rising) においてはアイルランド側の最初の犠牲者の一人となった。しかし平和主義者のスケフィンソンがなぜ武装蜂起の犠牲者となり、後には反英闘争の殉教者として扱われるようになったのか。本稿では主にスケフィンソンと妻ハンナの足跡をたどりながら、文字通り激動の時代となったアイルランドの1910年代を考察する。

## (1) フランシス・スケフィンソン (Francis Skeffington, 1878-1916)

フランシス・シーヒー・スケフィンソンの旧姓はスケフィンソンである。シーヒーという名字は男女「両性の平等を示すため」、1903年にハンナ・シーヒー (Hanna Sheehy, 1877-1946) と結婚した際に妻の名字を正式に自分の名前に追加したものだ。妻のハンナも同様に結婚時、自分の名前にスケフィンソンを加えている。アイルランドのキャヴァン (Cavan) 州で生まれ、北部ダウ (Down) 州で育った。1830年代から設置された初等教育の機関である国立学校 (National Schools) の調査官だった父ジョゼフと妻メアリーの間のひとりっ子としてカトリックの家庭で育ったスケフィンソンは幼少時には学校に通わず、家庭で父親から教育を受けた。1896年に現在のユニバーシティ・カレッジ・ダブリン (University College Dublin/ UCD) に入学して現代言語を学び、1900年には学部を卒業、1902年には修士の学位を得ている。後年有名な作家となるジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941)、後に義弟となるトム・ケトル (Thomas M. Kettle, 1880-1916)、そして妻となるハンナとは大学で知り合っている。スケフィンソンは全く慣習にとらわれない人物でその風貌も一風変わっていた。長いひげを生やし、いつでもツイードのジャケットとニッカボッカーという出で立ちだったので、学生時代のジョイスはスケフィンソンに「毛むくじゃらのイエス」(Hairy Jesus) というあだ名を

付けていた。また自身の作品『若き芸術家の肖像』(*A portrait of the artist as a young man*) や『スティーヴン・ヒーロー』(*Stephen Hero*) ではスケフィンソンをモデルにしたマッカンの (McCann/MacCann) という人物を登場させている。

スケフィンソンがどのように自身の思想を形成していったのかについてはこれまでのところ十分に深い考察はなされていない<sup>3</sup>。後述するが反英的な活動を理由に親族に逮捕者がいた妻ハンナや義弟トム・ケトルの家庭とは対照的にスケフィンソンの親族には「逮捕者がいた記録はない」。生家では書物には事欠かず、スケフィンソン自身によると「女性問題に最初に関心を持ったのは11歳、W.T.ステッドがグラッドストーンについて書いた記事を読んだ時」で、その記事では英国首相の「グラッドストーンは女性のために何もしていないとステッドは書いていた」。W.T.ステッド (W. T. Stead, 1849-1912) はイギリス人ジャーナリストで特に社会福祉の分野の記事を多く書いていた。今日のジャーナリズムの基礎を築いたとも評される人物で、タイタニック号の事故で死亡している。スケフィンソンは父からアイルランド社会の大きな問題であった大地主制度と、その廃止を目指して結成された「土地同盟」(Land League) についての話を聞き、「不平等さへの鋭い感覚とイギリスからの独立の必要」を感じるようになったという<sup>4</sup>。このことから土地同盟の中心人物の一人であるマイケル・ダヴィット (Michael Davitt, 1846-1905) を尊敬するようになり、後年ダヴィットの伝記を出版するに至った<sup>5</sup>。土地同盟はアイルランドの貧困の原因であった大地主制度の廃止と小作人の土地所有実現を目指し、地代不払い運動などを繰り返した。1880年前後の数年間に最も激しく活動し、農村部では「土地戦争」とも呼ばれる闘争を主導した。当時の地主の多くはイギリス在住の貴族などの不在地主だったため、ナショナリズムとも結び付いた運動だった。「ボイコット」という言葉が新たに誕生するきっかけとなったチャールズ・スチュアート・パーネル (Charles Stewart Parnell, 1846-1891) による不服従運動も土地同盟の活動の一環である。

## (2) ハンナ・シーヒー (Hanna/Johanna Mary Sheehy, 1877-1946)

ハンナ・シーヒーはスケフィンソンと同様カトリックの家庭に育った。コーク (Cork) 州で生まれティペラリー (Tipperary) 州に一時期住んだ後、10歳の頃から首都ダブリンに住んだ。スケフィンソンに比べればよりアイルランドナショナリズムの影響を強く受けて育ったと言える<sup>6</sup>。父親のデヴィッド・シーヒー (David Sheehy, 1844-1932) はアイルランド議会党 (Irish Parliamentary Party/Nationalist Party<sup>7</sup>) の国会議員、デヴィッドの兄ユージーン・シーヒー (Eugene Sheehy, 1841-1917) はカトリック神父だったが同じくナショナリストで、土地同盟の活動に深くかかわっていた。そのため「反逆の神父」「土地同盟の神父」と呼ばれていた。ユージーンはまた後にアイルランド共和国大統領となるイーモン・デヴァレラ (Eamon de Valera, 1882-1975) の教師だっ

たことでも知られる。兄弟とも大飢饉 (1845-50) の直後の時期にリムリック (Limerick) 州で育ったため「農村の貧困と地主の強欲さ」を直に知っていた。二人とも反英的な活動のためそれぞれ6回ずつ逮捕されている。ユージーンは土地同盟の活動においてはパーネルと近く、アイランド各地で開かれた集会では共に演説を行った。土地同盟が弾圧を受けた後には約9年間 (1894-1903) アメリカに逃れて暮らし、そこでアイランド独立運動のための資金集めをした。また当時の神父としては珍しく、パーネルの妹アンナ (Anna Parnell, 1852-1911) が中心的な役割を果たした女性土地同盟 (Ladies' Land League) を支持していた。ハンナは女性解放論に否定的だった父デヴィッドよりも急進的な伯父ユージーンの影響をより受けたと考えられている<sup>8</sup>。

ハンナの母ベッシー (Bessie/ Elizabeth McCoy) もまた自身の兄弟二人が同じく反英的な活動を理由に逮捕されている。ハンナによれば幼少期の記憶のひとつに4歳の時の思い出があり、それは伯父のユージーンをダブリン市内のキルメイナム刑務所 (Kilmainham Gaol) に訪ねて行ったことで、そこに連れて行ってくれたのは母の姉妹だったという。このように言わば筋金入りのナショナリスト家庭に育ったハンナは「強い正義感、借地人の権利意識、そしてアイランドが独立する必要」を強く感じるようになり、独立を果たした後のアイランドでは「女性が平等な役割を果たすだろう」と考えていた<sup>9</sup>。

ハンナはアイランドで大学を卒業した最初期の女性の一人である。スケフィンソンと同じく現在のユニバーシティ・カレッジ・ダブリン (UCD) の卒業生だが、当時は男女が同じ場で学ぶことは許されておらず、ハンナはUCD内の女子学生用の大学 (St Mary's University College) で学んだ。1899年に学士、1902年には修士号を現代言語で得ている。UCDの前身はカトリック大学 (Catholic University) で、長い間カトリック教徒が教育を受けることを禁じられていたアイランドで1854年になってようやくカトリック教徒のために設立された大学だった。アイランド社会の支配層はイギリスからの移住者のプロテスタント教徒で構成されており、その子息が通うための大学トリニティ・カレッジ・ダブリン (Trinity College Dublin) ははるか以前の1592年に設立されていた。こうした経緯もあり、スケフィンソンらが学んでいた当時、UCDはカトリック教会によって運営されていた。ハンナとスケフィンソンが出会ったのは大学時代だが、男女の学生が集まることができたのは大学近くに会った国立図書館だった。ハンナは大学入学後「個人の根本的な政治的力であるはずの投票権が女性には認められていない」ことに「驚き憤慨」して1902年には女性参政権活動をしていた団体 (Irish Women's Suffrage & Local Government Association) に入会し、以後生涯にわたって女性の参政権や地位向上を求めて戦うことになる<sup>10</sup>。

ハンナには幼くして死亡した一人を除いて妹が3人、弟が2人いた<sup>11</sup>。母ベッシーは娘たち全員が息子たちと等しく教育を受けることに熱心だったという。先述の女性団体に

は姉妹全員と弟リチャードが参加していた。シーヒー家には学生たちが集まるようになり、その様子はジョイスの小説『ユリシーズ』(*Ulysses*)にも描かれている。ハンナの弟二人と友人だったジョイスはシーヒー家に入入りし、ハンナの妹メアリーに恋愛感情を持っていたといわれる。母ベッシーはこの小説の中で自身が「上昇志向の女家長」として描かれていることに激怒していたとも伝わっている<sup>12</sup>。

### (3) シーヒー・スケフィンソン夫妻

ハンナがスケフィンソンと結婚したのは1903年だった。この時期既にカトリック教の教えを捨てて無神論者になる途上にあったスケフィンソンだったが、後に自身も無神論者となるもののまだカトリック信者だったハンナをおもんばかって結婚はカトリックの伝統に従って行われた。しかし6年後に生まれた一人息子オーウェン (Owen Sheehy Skeffington, 1909-70<sup>13</sup>) にはカトリック教徒としての洗礼を受けさせなかった<sup>14</sup>。結婚記念の写真は当時としては、あるいは今日でも、珍しいもので、二人とも結婚衣装ではなく大学卒業生用のガウンを着ている。同じ名字を名乗る二人の活動は結婚後本格的になり、アイルランド社会に今日に至るまで影響を与え続けている。シーヒー・スケフィンソンの名前は「現代アイルランドのフェミニズムとリベラリズムの象徴」となっている<sup>15</sup>。この名前を受け継ぐ孫は「彼らが人としていかに並外れていたかに気付いた時、やや恐ろしくさえ思った」と語っている<sup>16</sup>。

夫妻は1912年にIrish Women's Franchise League (IWFL) を結成し、その機関紙として*The Irish Citizen*を創刊する。1920年まで発行が続いたこの機関紙と夫妻のIWFLでの活動は、20世紀初頭のアイルランドにおける女性解放論、女性参政論の中心となるものである<sup>17</sup>。*The Irish Citizen*の表紙には「男女に等しく市民の権利、男女に等しく市民の義務」<sup>18</sup>の標語が毎回掲げられ、これが夫妻の活動の確固たる指針を簡潔に示している。一方この時期のアイルランドでは自治や独立を目指す運動が危険なまでに活発化しており、市民の間では様々な組織が結成されていた。女性団体の中でも参政権よりもナショナリズムを優先する団体もあり<sup>19</sup>、以降アイルランドの女性問題は「自治独立が先か参政権が先か」という難問に直面することになる。ハンナはアイルランドの独立を望んでいたが「ナショナリスト団体に属する女性たちは男性の補助的役割に甘んじている」と考えてこれらの団体には参加しなかった<sup>20</sup>。

### (4) 自治運動の挫折と武装化

1910年代初頭のアイルランド情勢は不安定だった。これは1870年代から続いたアイルランド自治運動 (Home Rule Movement) の挫折が要因のひとつだ。1798年の大規模な反乱を鎮圧した後、イギリスはアイルランドを合同法 (Act of Union) によって1801年から正式に連合王国の一部とした。しかしその後もアイルランドでは自治独立

を求める動きが続き、特にパーネルの登場以降、土地同盟やアイルランド議会党が大きな影響力を持った。これらの運動は「法に基づいたナショナリズム」(Constitutional Nationalism) と呼ばれ、アイルランドの自治独立問題を武装闘争ではなく法によって解決しようとするものだった。合同法によってアイルランド議会が廃止されたため、アイルランド選出の国会議員はイギリス議会で論争を繰り返した。アイルランド自治法案 (Home Rule Bill) は1886年に議会下院で1893年には上院でそれぞれ否決された後、第三次自治法案が1914年9月に上下両院を通過して成立した。しかしそのひと月前の8月に第一次世界大戦が勃発したため、自治法は大戦終結まで施行が見送られることになった。数十年以上の時間を費やした末、自治運動は事実上成果をあげられなかったことになる。

この合法的な自治運動に不満を持った者たちは1910年代の初めには武装化を始めていた。この不満には2つの種類があった。ひとつはいつまでたってもアイルランド自治が実現されないことに対する主にカトリック教徒のアイルランド人たちの不満、もうひとつはアイルランド自治を実現させたくない主にプロテスタント教徒で先祖をイングランドやスコットランドに持つアイルランド人たちの不満だ。プロテスタント教徒のなかでも現在北アイルランドとなっているアルスター地方の住民たちの自治法案への反発は特に激しかった。宗教改革後プロテスタント国家となったイギリスは、アイルランドをもプロテスタント化すべく17世紀以降主にアルスター地方にプロテスタント教徒を多く入植させた。そのためアイルランド国内の他の地域に比べて北部はプロテスタント教徒の割合が高くなっている。彼らのうちの強硬派はユニオニスト (Unionist) やロイヤリスト (Loyalist) と呼ばれ、アイルランドが連合王国の一部であること、また自分のアイデンティティーがアイルランド人ではなくイギリス人であること、はどんなことがあっても譲れない一線である。このことは近年の北アイルランド紛争や、現時点で交渉が行き詰っているイギリスのEU離脱後の北アイルランド地域の扱いについての問題など、今日においてもアイルランド情勢を不安定化させる一因となっている。

アイルランド自治が実現する可能性に危機感を持ち、1910年代にまず武装を始めたのは北部のプロテスタント教徒だった。1913年1月に民兵組織のアルスター義勇軍 (Ulster Volunteers Force/UVF) が結成され、自治法が適用される範囲から北部を除外することを求めた。もし自治法案が可決、施行された場合には「アルスターを守るため」に行動すると宣言した。約9万人が所属し、ドイツからの武器輸入など違法行為を繰り返したが、摘発されることはなかった。UVFの代表でユニオニスト党 (Irish Unionist Parliamentary Party) 所属の国会議員エドワード・カーソン (Edward Carson, 1854-1935) は、この組織は「違法だろうと言われた。もちろん違法だ。軍事訓練は違法、民兵組織も違法で、政府も違法だと承知だ。しかし政府はあえて介入しないだろう」<sup>21</sup>と豪語した。スケフィンソンは彼らを「アイルランドにおける忠実なイギリス人駐屯軍」

と呼び、この状況を次のように説明する。

武装や軍事訓練の類はアイルランドでは厳しく取り締まられてきた。カーソンがそれを始めるまでは。・・・武装を許すほどにはアイルランド人を決して信用してこなかったからだ。しかしカーソンとその支持者たちは捕まらなかった・・・なぜなら彼らは事実上アイルランドにおけるイギリス支配の代理人だからだ。・・・ところがアイルランドのナショナリストたちが、アイルランドの権利と自由を確保しよう誓って、武装することは全く違う扱いを受ける。・・・ナショナリストが武器を輸入しようとする政府や役人の態度は全く違う。最大限の警戒態勢をとるのだ<sup>22</sup>。

北部プロテスタント教徒の武装化は自治独立を目指すカトリック教徒たちにも武装化の機会を与えることになった。1913年11月にダブリンで結成されたアイルランド義勇軍 (Irish Volunteers) はUVFに対抗する組織として始まった。UCDの教授でゲール語の復興を目指す組織ゲール同盟 (Gaelic League, 1893-) の創設者でもあったオーン・マクニール (Eoin MacNeill, 1867-1945) は論文 'The North Began'<sup>23</sup> でナショナリストに武装を呼びかけ、これを契機として義勇軍は結成された。最大で16万人程が所属していたアイルランド義勇軍には、スケフィンソンとかかわりの深い人物が加わっていた。

##### (5) トム・ケトル (Thomas M. Kettle, 1880-1916)

トム・ケトルはダブリンの比較的裕福なカトリック教徒の農家に生まれた<sup>24</sup>。12人いる兄弟姉妹の7番目に生まれたトムは父アンドリュー (Andrew J. Kettle, 1833-1916) の影響を強く受けて育った。アンドリューは土地同盟の創設者の一人で、またダヴィットとも親しく、同盟の「地代不払い宣言」の署名者でもあった。土地同盟での活動を理由にキルメイナム刑務所に投獄された経験もあるが、トムはこのことを誇りに思っていたという。またアイルランド議会党に所属してパーネルを支持し、パーネルのスキャンダルによって党が内部分裂し、ハンナの父をはじめ多くが反パーネルの立場をとった後にもパーネルの支持を続けた。農家としての知識と経験を持つアンドリューは、そのような経験のないパーネルにとっては貴重な存在で、彼の助言を大切にしていた<sup>25</sup>。このような家庭環境はシーヒー家に通じるものがあったと言えよう。

ケトルは1897年にUCDに入学し、ここでスケフィンソンやジョイスと知り合う。その頭脳の明晰さや雄弁さで学生の間でも目立つ存在だった。1902年に卒業した後1905年には弁護士資格を得る。1906年には北部タイローン (Tyrone) 州の選挙区からアイルランド議会党の議員として選出され国会議員になった。北部の選挙区から立候補した経験から「アルスターのユニオニストとアイルランドの他地域との融和が国内政治においては最優先で達成されるべき」との信念を強くした。1908年にはUCDの国民経済学の

教授にもなって多忙となったため、1910年に議員の職は辞した。UCDは1908年以降施行された新大学制度によって宗教団体ではなく国によって管理されることとなり、ケトルは新制度で最初に任命された教授の一人だった。しかし国民経済学は人気のある科目ではなく、ケトルの授業の学生数は少なかった。国会議員としてその雄弁さで人気を博し「ナショナル・スポークスマン」にも成り得たケトルは大学での職にはあまり満足していない様子だったという<sup>26</sup>。

1909年、ケトルはハンナ・シーヒーの妹メアリーと結婚し、スケフィントンとは義兄弟の関係になる。スケフィントンとケトルはアイルランドの独立を求めるナショナリストという点では共通していたが、その他においては対照的だった。ダブリン出身のケトルは黒髪の長身で容姿端麗、きちんと髭をそり、気さくで、顔色は蒼白、思い悩んだような目と大きく優しい口元、服装にはいつも気を遣っていた。一方キャヴァン出身のスケフィントンは小柄だが頑丈で、生き生きとした目と赤茶色の髭をし、きびきびとして率直な性格だった。常にツイードとニッカボッカー、長い靴下にブーツ、ツイードの帽子の出で立ちで、ジャケットの襟には「女性に投票権を！」(Votes for Women!)の大きなボタンを着けていた<sup>27</sup>。

スケフィントンとハンナにとっては女性解放、社会主義、平和主義の実現が最終的な目標だった。しかしアイルランド自治法案に女性参政権が含まれなかったことに失望し、ハンナは1912年と13年にこれに抗議する活動を行って逮捕されている。その結果教師としての職を失う。1902年にUCDで職を得ていたスケフィントンも女性を男性と同等に入学させない大学に抗議して2年後には辞職している。

一方、ケトルも女性参政権には賛成し、社会主義にも理解を示してはいたが、パーネルを英雄視するケトルにとってその悲願だったアイルランド自治は最も優先されるべきものであった。女性解放問題など他の課題は自治を獲得してから達成され得る、と考えていた。また平和主義者のスケフィントンが民兵組織である義勇軍を問題視し、さらにはこれに女性が平等に参加できないことを批判していたのに対し、ケトルは創設時から義勇軍に参加した。ケトルは「相違の解決法としての戦争という至極野蛮なやり方をアイルランドほど理解している国は世界中で他にない。今アイルランドがやろうとしていることはいかなる人間の市民的宗教的自由をも暴力によって脅かし、強制し、減退させようとするものではない。単に自分たちの自由を守ろうとしているのである」と述べて自衛のための組織であることを強調し、各地で演説を行った<sup>28</sup>。なおケトルの兄ラリーは義勇軍の「宣言書」をマクニールと共に執筆、発表している<sup>29</sup>。

## (6) 第一次世界大戦

義兄弟となったスケフィントンとケトルは意見の違いはありながらも、共に活動する場面もあった。1905年にケトルが*The Nationalist*という週刊新聞を発行して編集長とな

ると、スケフィントンは副編集長になった。1913年ダブリンで起きた大規模な労働者のストライキにおいては二人とも労働者側を支持し、ストの平和的解決を目指して仲裁役を買って出た。ダブリン市内はこの時騒乱状態に陥り、労働者を警察の暴力から守るためとしてアイルランド市民軍 (Irish Citizen Army) が労働者側を支援するジェイムズ・コノリー (James Connolly, 1868-1916) を中心として結成された。義勇軍結成の数週間前に創設された市民軍には平和主義者のスケフィントンも副議長として参加したが、これはあくまでも労働者の保護のためという目的に賛同してのことで、後に市民軍が武装組織化したためスケフィントンは脱退している。

1914年に第一次世界大戦が始まるとスケフィントンとケトルの立場ははっきりと分かれた。同じ1916年に死亡したスケフィントンがアイルランド独立のための殉教者とされる一方で、ケトルが今となっては「アイルランドではほとんど知る人がいない」<sup>30</sup>存在になったのは大戦とのかかわりに一因がある。

イギリスの参戦により、アイルランド人もこの戦争に参加するの可否かという問題が生じた。アイルランドナショナリズムにおいては、イギリス軍に入隊することは敵にくみする恥ずべき行為とみなされる。先祖をイギリスに持つプロテスタント教徒にとってはイギリス軍入隊は何ら問題のない行為だが、カトリック教徒にとっては全く違う意味合いを持つ。19世紀末以降も反入隊活動は盛んで、ハンナの父デヴィッドやケトルもボーア戦争 (1899-1902) への協力に反対する活動を行っている<sup>31</sup>。この時期さらに状況を複雑にしたのは、アイルランド自治法が「大戦が終結すれば」発行するという事実だった。

大戦勃発時にもスケフィントンは当然ながら反戦の態度を貫き、イギリス軍に入隊しないよう幾度も演説を行う。「この戦争を受け入れてしまえば、我々は戦争を永続的にすることに手を貸してしまう。もし戦争を止めたいのなら、まずこの戦争を止めることから始めなければならない。この戦争を止める最善の方法は入隊を止めることだ」<sup>32</sup>と説き、1915年5月末に逮捕される。重労働6か月の判決を受けたスケフィントンは入獄後すぐにハンガーストライキを開始したため6日後に釈放される。これは「ネコとネズミ法」(Cat and Mouse Act)<sup>33</sup>と呼ばれた法が適用されたもので、体調が悪化した受刑者は釈放されるが回復すれば再び収監される、というものだった。釈放されたスケフィントンは8月にアメリカに逃れ講演や執筆を行った。12月に帰国するが、父親は戦時中でも反戦活動を続ける息子の身の安全を案じ「生計を立てられるかもしれない」アメリカに留まるべきだと手紙で伝えている。

平和主義者のスケフィントンは、大戦はもとより、「イングランドの難局はアイルランドの好機」とばかりに大戦に人的資源を割いているイギリスを攻撃するのは今が好機だと考える集団が武装化を進めていることにも危機感を持った。逮捕直前の1915年5月に発表した「公開書簡」はスケフィントンの考え方を最も表しているものとされる。こ

の書簡は、義勇軍の中心人物の一人で、後に「共和国宣言」の署名者となりイースター蜂起の首謀者として処刑されるトマス・マクドナー (Thomas MacDonagh, 1878-1916) への反論として書かれたものだった。スケフィントンとマクドナーはUCDの同窓で、1901年から翌年には教師としてキルケニー (Kilkenny) 州にある同じ学校に勤めていたこともあった。

君も知っている通り、私はアイルランド義勇軍の基本的な目的には完全に同意している。・・・「性別、階級、宗派の区別なく」アイルランドの自由のために断固として立ち上がるのだと表明してほしい、という私の提案をもしも執行部が受け入れていたら、私はすぐに加わっていただろう。しかし私は加わらなくてよかったと今思っている。なぜなら君の未成熟な組織が完全な軍事組織に成長するにつれて、その本質—一人殺しの準備—が私にはますます不愉快だからだ。

その活動の利点も理解している。野外の活動であるから、集会で歓声を上げたり決議したりするよりも何か良いものをアイルランドの若者に与える。自尊心と自助の精神を与える。これが軍事主義の最も良い点だ。しかしそれでもやはり軍事主義だ。殺すために組織されるのだ。

高い理想が君を活動的にさせているのは間違いない。しかしすべての軍事体制が同様に高い理想から始まったのではないか？君は搾取や抑圧のためではなく、搾取を阻止し防衛のために行動すると言う。しかしそれ以外の目的をまず最初に誓った軍事体制がこれまでにあったらどうか？君は圧政を終わらせるため、正しいものを打ち立てるため、以外の戦争は認めないと言う。しかし人々を入隊させることが必要な時、他のことを言う戦争屋がこれまでにいただろうか？

戦争は輝かしい、自分と同じ人間を殺す訓練をすることには何か「男らしい」ものがある、血を流さずに目的を果たそうとすることは臆病だ、という古く醜悪な伝統に義勇軍の多くが突き動かされているのではないか？

しかし君は言うかもしれない。アイルランドはヨーロッパにおいて軍事強国になるには小さ過ぎ貧し過ぎると。実際アイルランドの軍備はドイツやイングランドの規模には決してなり得ない。しかしアイルランドの国益にとって致命的になり得るのは同じだ。ヨーロッパの軍国主義がヨーロッパを血で染めた。アイルランドの軍国主義が血で覆うのはアイルランドの土だけかもしれない。しかし我々にとってそれは十分に破滅的だ。

数週間前、やはり義勇軍に入っている私の友人が私と同じ演台に立ち、南北分轄

を許すぐらいならアイルランドの丘を血で染めたほうが良い、と言って拍手喝采を浴びた。これが私の恐れる考え方だ。私は分轄に反対している。しかしそれを防ぐために払うにはあまりに高すぎる 代償だ<sup>34</sup>。

1916年2月の公開討論会でも義勇軍の動きを懸念し、「ドイツがイングランドに勝つ可能性はまるでない。だからアイルランドの自由をイギリスの敗北によって確保しようとするのは馬鹿げている。即時停戦こそがアイルランドや他の小さな国々、そして文明にとって最も有益だ」と話し、「アイルランドのためになら喜んで死ぬが、アイルランドのために人を殺すことは絶対にしない」と力説した<sup>35</sup>。

一方ケトルはアイルランド義勇軍の武器調達係として1914年7月からベルギーに滞在していた。ところが8月に大戦が勃発し、ケトルは戦争を目の当たりにすることとなる。そのまま9月までベルギーから新聞の特派員として戦況を伝えた。この時当のアイルランド義勇軍は大戦に兵士として参戦するか否かを巡って分裂する。アイルランド議会議会の代表で義勇軍の実権も握っていたジョン・レッドモンド (John E. Redmond, 1856-1918) は1914年9月20日、ウィックロー (Wicklow) 州で義勇軍を前に演説し、「アイルランド島全体の命運がこの戦争にかかっている」として義勇軍兵にイギリス軍入隊を呼びかけた。数日前に自治法案が王の承認を得て成立したばかりだったが、大戦が終わらなければ法が施行されない条件だったため、自治実現のためには戦争の早期終結が不可欠と考えての発言だった。「アイルランドナショナリストの代表がアイルランド人にイギリス軍への入隊を呼びかたのはこれが初めて」で全く異例な事態ではあったが<sup>36</sup>、当時義勇軍に所属していた約19万人のうち、17万5千人はレッドモンドを支持し、分裂してアイルランド国義勇軍 (Irish National Volunteers) を結成した。北部プロテスタント教徒のアルスター義勇軍も大戦参加を表明していたため、「この戦争がユニオニストとナショナリストの間の分断を癒す機会を与えてくれるとレッドモンドは本当に信じていた」<sup>37</sup>のだった。この呼びかけにケトルも賛同し、アイルランド帰国後にイギリス軍に入隊した。対して1万3千人余りに減ってしまった義勇軍は、レッドモンドの行為は義勇軍「本来の目的や宣誓と相いれない」として激しく反発した。創設者マクニールは「自分たちの政府を樹立するまでは他国の紛争には関与できない」「アイルランド人の命を大英帝国に奉仕するために犠牲にはできない」と語ってレッドモンドを批判した<sup>38</sup>。

「彼とその党は自治の実現のためだけに議会に選ばれている。アイルランドの選挙では他の問題が争点になったことは一度もない」「レッドモンドに託されているのは自治問題だけなのに、国民の負託もなくヨーロッパの戦争でイングランドの支持をさせようとしている」とスケフィンソンも猛烈にレッドモンドを批判、以下のように続けている。

アイルランドはヨーロッパで最も人口が少なく最も貧しい国だ。前世紀のイングラ

ンドによる慈悲深い支配のおかげで。だから無駄にできる命もお金もない。それにオランダ、デンマーク、スウェーデンやスイスが、アイランドよりも豊かで人口も多いのに、戦争にかかわるべきでないと感じている。ならば一層、国民を戦争に巻き込まないようにあらゆる努力をするのがアイランド人国会議員の責務だ。…今ベルギーは難局にはあるが、それでもイングランドのせいでアイランドが被った苦しみの10分の1にもならない。アイランドはイングランドから受けた傷のせいであらゆるすべての毛穴から血を流しているのだ<sup>39</sup>。

他方ケトルは1914年11月に中尉として入隊、前線に行くことを希望したが既に30代半ばであったうえ病弱だったため、アイランド国内での新兵募集が任務となった<sup>40</sup>。1915年1月のある集会ではイギリスの戦争のために新兵を募っていることを匿名の手紙などで批判されていると認め、この戦争を「なぜ戦うのか？」との問いに「私としてはアイランドのために戦っている。単純に言えば我々の存在そのものために戦っている」と答えている。ヨーロッパ大陸での生活経験があり、以前から「自由なアイランドは自由なヨーロッパの中にあるべき」と考えていたケトルは、「プロイセンの戦争哲学が打ち負かされない限り、我々が知っているヨーロッパ、正義、名誉、人間の慈悲を持ったヨーロッパは失われてしまう。ベルギーに対してなされた罪が罰されない限り、国際法はただの空文だ」と訴えた。そして「プロイセン主義はすべての小さな国家の終わりを意味し、大陸での戦いの場でアイランドを守るか、もしくは何もしないかだ」とも訴えた<sup>41</sup>。またレッドモンドと同様、戦争に協力すれば戦後イギリスが自治法の施行を遵守してくれるだろうという希望を持っていた。8月の新兵勧誘の演説は以下のように伝えられている。

ケトル氏の見解では彼は絶対にイングランドのために戦っているのではないし、そこにいた誰にもイングランドのために戦うよう頼んでもいないのだ。イングランドは自分のために戦うのに十分な大国だ・・・彼はイギリス植民地のために戦っているのでもないし、人々にそうしてほしいと頼んでもいない・・・彼はアイランドのために戦っているのであり、人々にもそうしてほしいと頼んでいるのだ<sup>42</sup>。

## (7) イースター蜂起

1916年4月に起きたイースター蜂起はこうした議論を完全にかき消した。4月24日イースターの月曜日、ダブリン市内中心部で起こった武装蜂起は、「共和国宣言」を発してアイランドのイギリスからの独立を宣言した。蜂起を秘密裏に計画し実行したのは、大戦に参加しなかった義勇軍の主要メンバーとコノリーを中心とした市民軍だった。当初全土での蜂起を計画していたものの成功せず、ダブリン市内のみでの戦いとなった。

大戦中かつイースター休暇だったためイギリスの不意を衝く作戦だった。しかしすぐにイギリス軍が動員されて応戦し、6日後アイルランド側が降伏した。市民や兵士等合わせて約500人の死者を出し、武装蜂起としては完全な失敗だった。ダブリン市内の経済的損失も大きく、アイルランド国民は初めこの蜂起には否定的な感情を持っていた。しかし数週間うちに首謀者とされた15人がイギリス軍によって次々に処刑され、16人目が8月に処刑されると事態は一変、反英感情が高まった。アイルランドを代表する詩人イエイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) の作品がそれをよく物語っている。イエイツ自身も蜂起直後は批判的だったが、処刑の残酷さに動揺して作品を残している。「すべてが変わった/全く変わってしまった」(All Changed/ Changed Utterly)<sup>43</sup>と。この蜂起を契機としてアイルランドの独立運動は武装闘争が主流となり「合法的なナショナリズム」の居場所はなくなった。レッドモンドの議会党は急速に支持を失って1922年に消滅、イギリス軍への入隊希望者も激減した。大戦終結後の1918年から21年までアイルランドとイギリスは独立をめぐる戦争となり、1921年末の停戦合意によって南部アイルランドは自治州となり事実上の独立を果たすことになる。しかし北部は連合王国に残留することとなった。

この蜂起の最中に起きたスケフィンントンの死は「彼自身が体現していた一つの時代の終わり」をも意味していた。スケフィンントンが示していたのは「政治、文化、学問においてそれ以前や以後に比べて最も多くの選択肢があった時代」のアイルランドであり、「新しい考え方や新しい形式の政治社会運動が議論され実験された時代においてスケフィンントンは不可欠な人物」だった。しかし蜂起とそれがもたらしたスケフィンントンの死は「この時代の終わり」と「極度に偏狭なアイルランド政治」の始まりとなった。「大戦、北部のカーソン、蜂起の短絡さ」は「スケフィンントンのように別のやり方を好んだだろうナショナリストたち」<sup>44</sup>の居場所を失わせ、武装組織の台頭を招いた。

## (8) スケフィンントン殺害

蜂起が起こる前日、スケフィンントンはコノリーら「共和国宣言書」の署名者たちに出会っており、蜂起の計画は知らされなかったものの、義勇軍が市内に動員されていることに気付いていた。翌月曜、スケフィンントンはダブリン市中心部にいて蜂起を目撃する。証言によればスケフィンントンは「真っ青な顔をして落胆していた・・・本当に混乱した姿だった。銃弾が飛び交う中をまるで雨降りの日のように立っていた」<sup>45</sup>。別の人物は両手を大きく広げ「こんなことは起きてはいけなかった。本当に嘆かわしい」と叫んでいるスケフィンントンを目撃している<sup>46</sup>。またこの時スケフィンントンと会話した人物によると「彼は蜂起を愚行、志の高い愚行と言い、成功する唯一の可能性はドイツが上陸してくることだ」「平和主義者の私は蜂起には反対だ」と話した<sup>47</sup>。

シーヒー・スケフィンントン夫妻はこの日アイルランド側の本拠地の中央郵便局

(General Post Office) に行った。スケフィンソンは通りで起きている略奪を見かねて首謀者たちに対策を取るよう訴えた。近くのホテルに泊まっていた女性は「空っぽの路面電車の車両の上に登って群衆に呼びかけている男性を見た。それはシーヒー・スケフィンソンで人々に静かに秩序を守るよう、静かに家に帰ってそこにとどまり平穏を保つように懇願していた。スラム街の人々が店を破壊し略奪していた」<sup>48</sup>。ハンナは伯父のシーヒー神父がそこにいて驚く。伯父は「反乱者たちに精神的な慰めを与えるため」そこにおり、数日後この建物から焼け出されるまでとどまった。月曜の終わり、歩いて帰宅するスケフィンソンに会った女性は次のような会話をした。

彼は蜂起を嘆かわしい間違いだと言った。革命を正当化できるのはそれが成功した場合のみで、この反乱は奇跡でも起きない限り成功しない、と。私はたとえ成功してもこのような暴力的なやり方は正当化できないと言った。彼は全く同感だと言い、この蜂起は西洋の軍国主義と武力が大義を果たすための唯一の方法だという考え方の必然的な結末だと付け加えた。彼は別れ際、警察がいないのと群衆の興奮状態のせいで夜に大規模な被害が出るのではないかと心配していた<sup>49</sup>。

その夜夫妻は自宅で、略奪を取り締まるために市民による警備を組織するべきだと話し合い、翌火曜スケフィンソンは市内で警備への参加を募るビラを配った。ハンナは反乱側に食糧を届けるなどしていた。スケフィンソンは一日中略奪を止めるのに必死で、協力者を求めて市内を歩き続けた。後に息子のオーウェンと結婚した女性は、スケフィンソンが「いじめ、不当な扱いや体罰などがある学校生活によって頑強になるという経験をしなかったので」「純粹さという鎧を着ているような」人物だったと評している<sup>50</sup>が、この日の行動はまさにそう思わせるものだ。

スケフィンソンが命を落としたのは蜂起が始まって3日目の水曜日、26日の朝だった。首謀者たちよりも先にイギリス軍に殺害されたため、イースター蜂起の「最初の殉教者」とされる。この殺害はどのような経緯で起きたのか。翌年以降ハンナはアメリカで講演活動を行っているが、以下はその一部であり、経緯を詳しく述べている。

イースターの月曜、蜂起が始まった時、夫はダブリンにいました。ダブリン城<sup>51</sup>が攻撃された時、あるイギリス軍将校が重傷を負い、門の近くで倒れて出血死しかけていました。銃弾が行き交っていたので誰も助けに行きませんでした。夫はこれを知って・・・戦火をくぐって駆け付けました。しかし既にその将校の友人たちが城門の中へと彼を救出した後で、そこには血だまりがあっただけでした。その夜私は夫を責めました。そのような危険を冒すなんて、と。彼はあっさりと答えました。「誰だろうと、助けられる可能性のある人を死なせるわけにはいかないよ」。彼らし

い単純だが英雄的な行為、冷静な勇気、そして血を流すことへの嫌悪です。

月曜と火曜はずっと親英派による略奪行為を止めるために活動していました。彼は色々な店を助け、市民による警備を呼びかけるビラを貼り、多くの市民や神父の支援を得ました。彼は群衆を説き追い払いました。しかし火曜の夕方になると皆が怯えていました。彼はその晩市民警察を結成するために集会を呼びかけました。私は彼に5時半頃会いました。私たちは一緒にお茶を飲み、私は回り道をして帰宅しました。息子が気がかりだったからです。私が二度と夫の姿を見ることはありませんでした。

アイルランドの自由のために活動していたので、イギリス人から見れば夫の逮捕は望ましいものでした。そして彼の人相書きは橋の周辺に配られていました。帰宅するにはその橋を通るだろうからです。予想通り、7時から8時の間に彼がポーテボロ/Portobello橋を渡った時、そこを警備していたモリス/Morris中尉が夫を逮捕させました。夫は武装しておらず、杖を持って一人で通りの真ん中を歩いていました。橋に差し掛かった時、群衆の誰かが夫の名を叫びました。彼は逮捕され、抵抗することなくポーテボロ兵舎へ連行されました。持ち物を検査され尋問されました。犯罪性のある書類は何も持っていませんでした。副官モーガン/Morgan中尉は軍司令部に夫と他の逮捕者の報告をし、スケフィンソンは何の罪にも問われていないが、他の同様の者たちと共に釈放するのかと尋ねました。命令はスケフィンソンを拘留し他の者は釈放せよとの内容でした・・・拘留を伝えられると夫は私に連絡するよう頼みましたが拒否されました。私には何らの伝言も許されず、彼の死の通知もなく、2度の埋葬も知らされず、夫の殺害についての細切れの情報は少しずつ、協力的ではない軍から引き出さなければなりませんでした。

午前0時頃、ボーエン・コルサースト/Bowen-Colthurst大尉が看守長のドビン/Dobbin中尉の所へ行き、囚人を引き渡すよう命じました。これは違法行為です。看守長は指揮官による書面での命令なしには、自分が監視している囚人を引き渡してはならないのです。私の夫は人質として連れ出されました。両手を後ろ手に縄で縛られていました。彼はそれからコルサースト大尉とレスリー・ウィルソン/Leslie Wilson中尉が率いる捜索隊と一緒に外へ連れていかれました。彼らは進むにつれてラスマイズ通り/Rathmines Road沿いの家々を撃ちました。窓辺に人が出てこないようにするためです。彼らはラスマイズカトリック教会の反対側で二人の少年を見かけました（一人はコード/Coadeという名の17歳）。彼らはその夜礼拝に参加して帰宅するところでした。大尉は彼らを尋問して戒厳令が発せられているの知らないのかと尋ね、彼らを「犬のように」撃ち殺すこともできるのだと言いました。コードが後ろを向くとコルサーストは「奴を叩きのめせ」と言い、下級兵の一人が自身のライフルの端で殴ってあごの骨を折り、少年は気を失ってしまいま

した。それからコルサーストは自分のリボルバーを取り出すと、倒れている少年を撃ちました。少年は血まみれで倒れたまま残されました（その場所には血の跡が何日も残りました）。後になって彼は救急車で兵舎に運ばれましたが、そこで意識を回復することなくその夜に死亡しました。私の夫はこの恐ろしい殺人に抗議しました。するとコルサーストに祈りを捧げるように言われました・・・というのも次は彼になりそうだからと言うのです・・・この週少なくとも他に2件の殺人をコルサーストは犯しています・・・

夫はそれから橋まで連れていかれウィルソン中尉の監視下に置られました。コルサーストは・・・もし自分たちの隊が狙撃されたらスケフィンソンを撃ち殺せと命じました。ウィルソンはその命令には「おかしな点はなく」実行するつもりだったと証言しています。実際アイルランドの自由を抑圧しようとする部隊にとってこのように「人質」を取ることは一般的なやり方でした。

コルサーストはそれからジェイムズ・ケリー / James Kelly市議会議員の家を爆破しました（彼らはシン・フェイン / Sinn Fein<sup>52</sup>党の市議会議員トム・ケリー / Tom Kellyと間違えたのです）。彼らはその建物を荒らし、店員と二人の編集者を捕らえました。ディクソン / Dicksonとマッキンタイア / McIntyreという編集者たちはそこに避難してきていたのです。彼らは警告なく爆弾をその家に投げ入れ一人を負傷させました・・・抵抗せず夫はその二人の編集者と一緒に兵舎へ生きて戻りました。（中略）

翌朝（4月26日）10時少し前、コルサーストは二人の編集者と夫を再び看守から呼び出しました。トゥーミー / Toomey、ウィルソン、ドビン中尉は他18人と共に看守の任に就いていました。コルサーストは「スケフィンソンと他の奴らを射殺する、これは正しいことだ」と言いました。以下は不運にもそこに捕らわれていた市民の証言をつなぎ合わせたものです。軍隊は当然隠蔽のために最大の努力をするものですから。証言によれば夫はコルサーストによって鍵のかかった独房から出されました。中庭を歩いていた時・・・一切の警告なく銃殺隊によって背中から撃たれました。夫が倒れているところを、他の二人の編集者たちが歩かされ、やはり警告なく冷酷に殺害されました・・・彼らはドビンが夫についてオルドリッジ / Aldridge軍曹に言うのを聞きました。「あの男はまだ死んでいない」と。夫は地面に倒れていながら動いていたのです。ドビンがこの事実をコルサーストに伝えると、彼は「始末しろ」と命じました。別の銃殺隊が整列し倒れている夫の体を穴だらけにしました。他の囚人たちは洗ったり掃いたりする音をその後2時間程も聞きました。そして彼らが中庭に出ることを許された時、殺人の痕跡はまだ残っていました。壁には血の跡があり銃弾で穴が開いていました。遺体の検視のための医師は呼ばれませんでした・・・現在に至るまで夫がどの位の間苦しみながら持ちこたえたのか、

また最初の銃殺隊より2番目の銃殺隊のほうが効果があったのかわかりません・・・11時頃ロスボロー/Rosborough少佐は司令本部とダブリン城に連絡を取りました。彼は遺体を埋めるよう命じられました。コルサースト大尉は報告書を提出しましたが（ロスボローに命じられたため）、任は解かれず何らの懲戒処分もありませんでした。

同じ日コルサースト大尉はカムデン/Camden通りで隊を率いていました。その時リチャード・オキャロル/Richard O'Carroll市議会議員（ダブリン市議会の労働党代表の一人）を拘束しました。彼は両手を頭の上に乗せて兵舎の裏庭まで歩き、そこでコルサースト大尉に肺を撃たれました。ある兵士が気の毒な気分でオキャロルが死亡したのか聞いたところ大尉は「気にするな、そのうち死ぬ」と言いました。大尉は彼を通りに引きずり出させてそこに放置させました。後になってパン屋のトラックが彼を救出したのです。10日後オキャロルはひどく苦しんだ末に死亡しました。6日間彼の妻は夫の消息を全く知らず・・・3週間後息子を出産しました。いつもの通りイギリス側はいかなる調査も拒否しました。

同日コルサースト大尉はある少年を捕らえました。この少年がシン・フェイン党について何か知っているか疑い、情報を提供するように要求したのです。この少年が拒否すると大尉は彼を通りでひざまずかせました。少年が十字を切ろうと手を挙げた時大尉は背中を撃ちました。この件への調査も拒否されました。これは氷山の一角に過ぎません。夫は水曜の夜に密かに埋葬されました。兵舎の裏庭に、遺体を袋に詰めて。

夫が帰宅しなかった火曜の夜から私は夫を探していましたが無意味でした・・・あらゆる噂が私の耳に届きました・・・今になれば何も通知が来なかった理由は明らかです。他の多くの人々と同様に夫が「失踪」したことにしたかったのです。彼の居場所を知らせないまま恐らく通りで殺されたのだろうと家族には思わせたかったのです。夫の殺害は沢山ある殺害事件のほんの一例です。唯一違うのはこの殺害事件は明るみに出たという点です・・・水曜と木曜私の捜索は無駄なものでした。そして金曜に恐ろしい噂を聞きました。私は兵舎に出入りしている医師に会おうとしましたが警官に止められてしまいました・・・私は以前からずっと警察の監視下にありました。

金曜になり私の募る心配を和らげようと、私の妹二人がポーテボロ兵舎へ問い合わせに出向きました。二人はすぐに逮捕され臨時の軍法会議にかけられました。後になって会議を司っていたのはコルサーストだと二人は気がつきました・・・コルサーストはシーヒー・スケフィンソンについては何も知らないと言い「早く兵舎を出た方が身のためだ」と二人に言いました。二人は武装した兵士によって追い出され、敷地を出るまではお互いに口をきくことを禁じられました・・・次にすること

は夫を事後の証拠で有罪にすることです。その日の午後、殺害された少年の父親コード氏が・・・息子を引き取りに兵舎の遺体安置室に行った時、他の数人のものと共に夫の遺体を見たと教えてくれました。このことは後にある神父も証言しています・・・6時過ぎに帰宅し7時前に息子を寝かしつけていると、家の周囲に兵士たちがいることに家政婦が気がきました。家政婦は恐ろしくなり息子を抱いて裏口から走り出しました。私は彼女を呼び戻そうとしました。と言うのも家の前も後ろも見張られているのがわかっていましたし、息子が心配でした。もし走っているのを見られたら撃たれるのではないかと。私が一階に降りた途端に銃弾が家の表窓に撃ち込まれ、その後すぐに兵士たちがライフルの柄でガラスを割る音が聞こえました。彼らは家じゅうに一斉に入ってきました。屋根に登った者もいました。そしてコルサースト大尉が私たちに向かってやってきました・・・「手をあげろ」と銃剣を突き付けて息子と私に言いました・・・彼らが家を検索している間私たち三人は「監視付き」で表の間に行くよう命じられ、少しでも動けば撃つと警告されました。家の外では兵士たちがひざまずき、ライフルを水平にかまえて私たちに狙いを定めていました。家の中では銃剣を抜いた兵士たちに厳しく監視されていました。これが3時間以上も続きました。家は完全に荒らされ何某かの価値があるものはすべて奪われました。本、写真、土産品、おもちゃ、リネン、家財道具・・・兵士の一人（ベルファスト出身）は恥じた様子で言いました。「私が入隊したのはこんなことをするためではない。奴らは家ごと持って行くつもりだ」・・・その夜は武装した監視が家に残っていました。コルサーストは夫の鍵を持ってきていました。それは夫の遺体から盗んだものでした。それで夫の書斎を開けました（夫はいつも鍵をかけていました）。私のすべての私的な手紙、結婚前の夫から私への手紙、彼の論文、劇の台本、全人生の労作が奪われました。何度も申し出た末、これらのうちのほんの一部が戻ってきました。しかし私の最も大切なもののほとんどは返してもらえず、それらを見つけようとする努力もなされませんでした。

5月1日月曜日、私のいない間にもう一度捜索があり、この時家にいた臨時の家政婦が兵舎に連行されました。彼女は1週間拘留されましたが、唯一の拘留理由は私の家にいたことでした。<sup>53</sup>

ハンナが以上の経緯を知ることができたのは、あるイギリス軍将校の努力によってコルサーストが軍法会議で裁かれたことと、ハンナの努力によって公式の調査委員会が開かれたことによる。夫妻が有名だったこともあって実現したが、ハンナ自身が記している通り、このような扱いを受けるのは稀で、他の犠牲者たちについては何らの調査もされなかった。

スケフィンソンらの殺害を命じた直後、懲戒処分を受けていなかったコルサーストが

軍法会議で裁かれることになったのはフランシス・ヴェインというアイルランド出身の上級将校の努力による。実はコルサーストもヴェインもアイルランド出身だった。蜂起が発生した時、最初に反撃の命令を受けたのはアイルランド国内に駐屯していたイギリス軍部隊で、こうした部隊には多くのアイルランド生まれの将兵が含まれていた。ひと口にアイルランド生まれと言ってもその背景や政治的信条は様々で、ヴェインとコルサーストは正反対とも言える。

イギリス軍人の父とアイルランド系アメリカ人の母の間にダブリンで生まれイングランドで育ったヴェイン (Francis Patrick Fletcher Vane, 1861-1934) は、1878年に士官として入隊、1900年前後にはボーア戦争で戦う。しかしこの時戦闘員と非戦闘員の区別なく攻撃するイギリス軍のやり方に反感を持ち、またボーア戦争自体が鉱山から得られる利益を守るための戦争なのではないかと考えるようになった。帰国後1902年には軍を批判する本を出版している。社会主義、平和主義、女性参政権、アイルランド自治の支持者だった。1914年9月にはアイルランド連隊 (Royal Munster Fusiliers) に配属となって、アイルランド人としての自意識と自治への支持をますます強くしたという。しかし軍上層部の反アイルランド感情に戸惑い、それが自身の任務の足かせになったという<sup>54</sup>。

ポーテボロ兵舎に配属されていたヴェインは蜂起が起こった月曜、ダブリンを離れていた。急ぎ戻って26日、兵舎近くの公会堂に見張り塔を建てていると「人殺し！人殺し！」と市民から野次が飛んだ。ヴェインはまもなくスケフィントンと二人の編集者がその日の朝、コルサーストの命令で射殺され、他にも数人市民を殺害したことを知った。後に詩人として有名になるモンク・ギボン (Monk Gibbon, 1896-1987) もヴェインに証言した。ギボンはスケフィントンが生きていた姿を最後に見た者の一人だった。ギボンもアイルランド生まれでこの時入隊後わずか3か月程だった<sup>55</sup>。ギボンは独房にいたスケフィントンから「前の晩に没収された8ポンドを妻に渡してほしい、そして妻に自分の居所を直ちに伝えてほしい」と頼まれた。「ギボンは最善を尽くす、すぐに戻る」と伝えその場を離れたが、その後すぐスケフィントンらは射殺された<sup>56</sup>。

ヴェインはすぐに司令官のロスボローにコルサーストの逮捕を訴えるが、ロスボローはコルサーストに兵舎から出ないよう指示をただけだった。この指示が無意味だったことは、金曜にコルサーストが武装してハンナの家への捜索に出かけたことから明らかだ。それどころか5月1日になるとヴェインはポーテボロ兵舎での任務を解かれ、その職務はコルサーストに引き渡された。コルサーストはヴェインを蜂起に同情的だと非難さえした。そこでヴェインは4月28日に着任した最高司令官ジョン・マクスウェル (John Maxwell, 1859-1929) 将軍への面会を求める。しかしこれがかなわず情報将校の一人アイヴォン・プライス (Ivon Price, 1866-1931) と面会すると、プライスはスケフィントンは死に値するのではないかと、言っ取り合わなかった。

軍が殺害を隠蔽すると考えたヴェインは翌2日にはロンドンへ渡り、議会党代表の

レッドモンドとキッチナー (Herbert Kitchener, 1850-1916) 陸軍大臣に事件を報告する。キッチナーはコルサーストをすぐに逮捕するよう命じる電報をマクスウェルに送るがマクスウェルはこの命令を無視、それどころかヴェインを除隊させるべきだとさえ言った。11日になるとこれがイギリス議会下院で問題となってようやくコルサーストの逮捕に至り、6月6日と7日に軍法会議が開かれることとなった。ヴェインの献身がなければコルサーストの逮捕は実現しなかった。

ダブリンに戻ったヴェインはハンナと息子のオーウェンを自宅に訪ねて哀悼の意を伝え、事件の報告をする。最初は歓迎されなかったが、ヴェインの尽力を知ってハンナは握手をし、「あなたが兵舎にいれば事件は防げたでしょう」と話した。ヴェインは7歳のオーウェンをダブリン動物園に連れて行き、その後ホテルで食事をした。ヴェインが鶏肉料理をすすめるとオーウェンは「僕はお肉を食べません。父は絶対にお肉を食べませんでした。父はもう野菜さえも食べられません」と答えた<sup>57</sup>。ヴェインはこの年の8月に「スケフィントン殺害事件に関連した自身の行動により職を解かれ」、ギボンと共同で事件ついでの本を出版しようとしたが、戦時中の検閲により許可されなかった<sup>58</sup>。

コルサーストの軍法会議では同僚の兵士や医師が証言し、口々に「普通の状態ではなかった」「任務には不適格だった」「異常な興奮状態だった」と語った。これを受けて「有罪だが精神異常」の判決が下り、コルサーストはイギリスにある精神病院に入院の措置が取られた。コルサースト自身は証言しなかった<sup>59</sup>。ハンナやヴェイン、スケフィントンの父らはこの判決に納得せず、7月になってハンナはアスキス英首相と面会する。首相は弔慰金として1万ポンドの提供を申し出たがハンナはこれを「口止め料」だとして受け取りを拒否し、政府による公式の調査を求めた。

コルサースト (John Bowen Colthurst, 1880-1965) はアイルランド南部のコーク (Cork) 州生まれで、アングロ・アイリッシュと呼ばれるプロテスタント支配層に属していた。先祖はオリヴァー・クロムウェルのアイルランド討伐 (1649-50) で功を成し、アイルランドに土地を与えられた。コルサーストの一族はドゥリプシー城 (Dripsey Castle) と呼ばれる1740年に建設された大邸宅を所有し、作家のエリザベス・ボーエン (Elizabeth Bowen, 1899-1973) はいとこにあたる。ボーア戦争を戦い、インド、チベットにも遠征した。国教会徒だったがインドにいる間に福音派に改宗し、部隊の中で祈祷集会を開いて「王のために戦うことで神の御業を行っている」と考えるようになるなど狂信的とも言える言動があったという。大戦時にはフランスのエーヌ (Aisne) で戦って負傷したうえ、弟も戦死して精神的にも疲弊していたため1915年の夏頃までには前線を離れてダブリンのポーテポロ兵舎勤務となり、主に新兵勧誘の職務に就いていた<sup>60</sup>。

8月に開かれた調査委員会は「スケフィントンは蜂起に一切関係がなく、武力の行使に反対して」おり「何等の罪にも問われていなかった」と認めた。コルサーストがスケフィントンを「人質」にして兵舎外に出たことは「異常で無意味」であり「どのような

理由があろうともそうする権利はなかった」と断じた。さらに二人の編集者も拘束して兵舎に帰ってきたコルサーストはロスボローに状況を「口頭で報告した」と証言したが、ロスボローは「非常な重圧のなかで働き、極度に疲れていて報告を聞いた覚えが一切ない」と答えている。三人の処刑後コルサーストが再びロスボローに口頭で報告し「自分の責任で三人を処刑したが、これにより自分は絞首刑なるかもしれない」と話したところロスボローは書面の報告を出すよう命じている。三人の遺体は「その時のダブリン市内の状況では棺を確保するのが困難」だったため「シーツでくるんで埋葬」し、後日遺族の要請をマクスウェルが許可し、宗教儀式を行ってから「再埋葬」した。これにはスケフィントンの父親が立ち会っていたが、ハンナは後までこの事実を知らなかった。

コルサーストは4月28日と5月9日の2度書面の報告書を提出しており、それらは調査委員会の報告書に掲載されている。最初の報告書でコルサーストは、三人から押収した書類から判断するに彼らは「非常に危険な人物」で「逃走の恐れ」があったため処刑を命じたとしているが、調査委員会はこれを「全く真実でない」と退けている。2度目の報告書になるとコルサーストは兵舎には「反乱の三人の首謀者」がいて仲間が彼らを「外から救出するのは容易だ」と考えていたこと、また「600人のドイツ人捕虜」が解放され「武装してダブリンを行進している」などの噂を聞き、「戒厳令下であることも考慮して三人を処刑することが明らかに自分の任務だと感じた」と記している。軍法会議での判決後、犯罪者用の精神病院に収監されていたため本人の聴取はできなかったが、委員会は収監の措置は「妥当」としている。そして戒厳令の発令は「将兵に新たな権力を与えるものではなく」「戒厳令が発令されているか否かにかかわらず、非武装で抵抗していない民間人を裁判なしで射殺することは殺人罪にあたる」との最終結論を出した<sup>61</sup>。近年ではコルサーストにはいわゆるPTSDの症状があったのではないかとやや同情的な分析もあるが<sup>62</sup>、本当に罪が問えないほどに精神に異常をきたしていたのかは不明だ。軍法会議での医師の所見も今日の基準で考えれば裁判の証拠とはなり得ない程度のものだ<sup>63</sup>。この結論にハンナもヴェインも納得しなかった。ハンナはスケフィントン以外の被害者についても同様の調査を行うよう特に訴えたが実現しなかった。またこの報告書は当初イギリスとアイルランドでは発行が禁止され、主に北米での発行となったがこれが反響を呼び、ハンナが翌年以降アメリカで講演旅行をすることになったものである。1918年にはウィルソン大統領にも面会した。コルサーストは1919年1月に民間の病院に移され、そこを退院した後には家族と共にカナダへ移住した。なおスケフィントンと同時に射殺された二人の編集者は親英的なユニオニストだった<sup>64</sup>。

## (9) ケトルの戦死

イースター蜂起が起こった時、ケトルはダブリンにいた。妻メアリーによるとスケ

フィントンの殺害を知ってひどく落ち込んでいた。ケトルはスケフィントンに弔辞を書いた。

フランシス・シーヒー・スケフィントンについて我々が思い浮かべること、勇気、生命力、有り余るほどの信念、無私の男らしさ、を文字では十分に表せない・・・消えることのない雲に覆われているような気分だ。

私にとって彼は多くの希望のために戦った素晴らしい同志だった。この汚れて破滅的な世界が我々の行く道を分けたが、私にとって彼は消えない炎であり続けた。この「扇動者」、この「公共への脅威」、この「妨害者」、は自己中心主義から完全に解放されていて、人を嫌悪する能力を持たなかった。<sup>65</sup>

メアリーによれば、蜂起後に処刑された首謀者のなかにもマクドナーやピアース (Patrick Pearse, 1879-1916) らUCDの同窓で友人だった者がいたこと、そして蜂起のせいで合法的に自治を得ることが不可能になったことにケトルは怒りの感情を持っていた。

蜂起には彼は全く同情していなかった—事実彼は激怒していた。彼らがすべてを台無しにしたと苦々しく言っていた—自由なヨーロッパにある自由な統一アイルランドという彼の夢を壊してしまったと。しかし彼の心に最も焼き付いたのは蜂起の首謀者に降りかかった恐ろしい仕打ちだった・・・蜂起そのものよりも無分別だった唯一のものはその鎮圧の方法だった。二つの間違いを足しても正しいものを作り出さない。二つの愚行から良識は生まれない・・・夫はイースターの週の惨劇の後、自分がそれまで示していた態度に増々固執するようになった。前線にすぐに送られるよう願った。そして1916年7月14日彼はフランスへと出発した。

ケトルは長く望んでいた前線へと出発した。メアリーによればケトルは「フランスの戦場で死ぬだろうという奇妙な予感をずっと持っていた」<sup>66</sup>。ケトルが所属していた第16アイルランド師団は一次大戦で最激戦とされるソンムの戦い (Battle of Somme) に加わり、9月9日ケトルはフランスのジンシー (Ginchy) で敵に撃たれ死亡した。その場にいたエメット・ドールトン (Emmet Dalton, 1898-1978) によると、ケトルは「腰をかがめた体勢でいたところ、銃弾が彼の着けていた鋼鉄の防弾ベストを貫通して心臓に入り」「一分ほどで息絶えた。私の十字架を両手に握っていた」<sup>67</sup>。この時アルスター義勇軍のうちの3万人も第36アルスター師団を構成し、やはりソンムで戦っていた。

1916年7月から11月のソンムの戦いではイギリス軍の死傷者が約42万人、フランス軍約19万5千、ドイツ軍が約65万と推定されており、アイルランド人将兵は4千人以上が死

傷した。ケトルの遺体は他の多くと共に埋葬され、家族は戦後ドールトンらの協力を仰いで埋葬された場所を見つけようとしたがかなわなかった<sup>68</sup>。

ケトルは戦場でも論文や手紙などを書き続けた。9月3日に書いたとされる「政治的宣言」と題された文章には以下が含まれていた<sup>69</sup>。

もし私が生き延びたら、私が次に書くアイルランドとイングランドとの関係についての本を「二人の愚か者：間違いの悲劇」と呼ぼう。我々の不幸な国が現在置かれている状況を生み出すにはイングランドのあらゆる愚かさと同様にアイルランドのあらゆる愚かさが必要だった。

私は多くのイングランド人やプロテスタントのアルスター人と付き合ってきた。そして彼らと我々アイルランドナショナリストとの間に本来あるべき結びつきは、海水よりも苦いこの隔たりによって断ち切られている。しかしこの隔たりには真に永久に続く理由などないことを私は知っている。

死亡前日の日付の兄への手紙には以下のように書いてある。

私は落ち着いていて幸せだが、猛烈に生きたい気持ちに駆られている・・・大砲が砲弾を吐き出している。頭上で特急列車が走っているかのような轟音だ。この地区には1分に10から100の砲弾が飛んでいる・・・どこかで死神が死ぬ運命にある者を見えない杖でたたいているようだ。昔、北欧の物語で読んだように。

もし生き残れたら、残りの人生は永久の平和のために働いて過ごそう。私は戦争を目撃し、現代の兵器に直面し、それが簡素な人間に対する何たる非道であるかを知っている。

死亡する前の週、ソナムに向かう前に妻に送った手紙には「私は生きたい、私の思想、執筆、仕事におけるすべての力を、この戦争という愚かなものを文明から排除し、代わりに理解と博愛を植え付けるために・・・もし神が私を生かしてくださるのなら、私は残りの人生を、愛と平和を説くための特別な使命として受け入れよう」と記し、次のような一文を書き送っている。アイルランド国内の融和と統一こそがケトルの願望であることは最後まで変わらなかった。

私の前にある唯一の使命は、アルスターとアイルランドとの和解を成し遂げるために献身することだ。この戦争から神が私たちの心に問いかけているのはこのことだ

と感じている<sup>70</sup>。

ケトルが書き残したもののなかでおそらく最も知られているのは、9月4日に一人娘に宛てて書いた詩だろう。「遅れて来た、熱望していた輝かしい時代に」「お前はなぜ私がお前を捨てたのかと尋ねるだろう」と詠み、以下のように終わる。

知っていてほしい 我々愚か者たちは 今愚かな死者たちと共に  
旗のためにも、王のためにも、皇帝のためにも死んだのではないことを  
夢のために死んだのだと  
羊飼いの小屋で生まれた夢のため  
そして貧者の密やかな聖典のため<sup>71</sup>

#### (10) 最後に

それぞれの夢はどうなったか。イースター蜂起の直後ケトルは、処刑された「男たちは歴史に英雄や殉教者として名を残すだろう。そして私は、もしも名を残せばの話だが、いまましいイギリス軍将校として名を残すのだろう」<sup>72</sup>と話したというが、実際そうだった。アイランドでは「1916年に命を落とした者について語る時、ソムで死んだ者を意味しない」<sup>73</sup>のだ。ケトルを祈念して胸像が建てられることになったが、当初1922年に完成披露を計画されていたものが、最終的な披露に至ったのは1937年のことだった。いまだアイランドの国内情勢が不安定であることなどが考慮されたもので、公式な式典のない簡素なものだった。一方、イースター蜂起の死者を追悼する記念祭は、1924年に初めて国主催の公式行事として開かれ、その後毎年イースターの週に実施されている。他方大戦に参加した兵士たちは国家によっても、また国民によっても追悼される機会を与えられなかった。アイランド共和国政府の首脳が大戦の犠牲者を追悼する行事に出席するようになったのはこの10年ほどのことである。ヨーロッパ全体を見渡していたケトルは「この偏狭さを嘆いただろう」<sup>74</sup>が、「大戦はイギリスとアイランド、カトリックとプロテスタントの関係に新しい出発点をもたらさなかった。それは相違を加速させ、南北分轄を確定し」<sup>75</sup>ケトルが望んだ統一アイランドを生み出さなかった。

ハンナは夫の死後も女性の権利拡大を目指して活動を続けた。アイランドではまだ連合王国の一部だった1918年にイギリスと同様30歳以上の女性に参政権が認められ、独立後のアイランド自由国 (Irish Free State, 1922-37) では1923年に21歳以上の女性に参政権が与えられた。これにより1920年代初めには女性参政権運動は下火となった。同時に独立戦争と内戦 (1922-3) が起こり、「国家の闘争が他の何よりも優先」される時代となった<sup>76</sup>。それでもハンナは活動を続け、1922年成立の自由国憲法や1937年成立の共和国憲法などに抗議した。特に共和国憲法はアイランドにおいて「カトリック教会

は特別な地位を占める」と定め<sup>77</sup>、女性の地位については自由国憲法よりも後退した内容だった。ハンナをはじめ女性活動家らはこれが「女性を家庭での役割に制限し、公職や雇用の場から締め出すもの」と考えた<sup>78</sup>。独立後1990年代末頃までのアイルランドはカトリック教会が強い影響力を持ち、非常に保守的な社会となったことを考えると、シーヒー・スケフィンソン夫妻が目指したような先進的な社会が実現したとは言えない。たとえば共和国憲法では離婚が禁止されていた。国民投票で離婚が合法化されたのは1995年のことだったが、離婚ができないことは女性だけでなく男性にも不利益であったことは言うまでもない。

イギリスからの独立戦争においては、コルサーストのようなアングロ・アイリッシュが所有する大邸宅がアイルランド側からの攻撃対象となった。スケフィンソン殺害後間もない1916年9月までにはコークにいるコルサーストの一族は「ボイコット」、日本的に言えば村八分の扱いを受け始めた。1920年6月コルサーストの住居が焼き討ちにあい、数日後には付近に住んでいたコルサーストの妹の家、さらには母が住居にしていたドゥリブシー城も焼き討ちにあった。この焼き討ちのちょうど1年後には再び同じ3か所が攻撃された。これはスケフィンソン殺害に対する報復と、コルサーストやその家族が二度とこの地域に戻って来られないようにするためだった<sup>79</sup>。同時にアイルランド各地で行われたこのような攻撃はパーネルの時代からの土地戦争の継続でもある。独立戦争は結果として「何世紀も続いた地主制度を終わらせ、生産性のある農業用地を地元住民に分け与える」ことになった<sup>80</sup>。

南部アイルランドの独立は、武力によって果たされた。これをスケフィンソンはどう思うだろうか。「アイルランドのために死ぬのは構わない」と言ったスケフィンソンの死を、ハンナは次のように解釈した。

フランシス・シーヒー・スケフィンソンは、彼が嫌悪し、そして彼の命を奪った軍国主義の醜態を、自分がこれほどまでにあからさまにするとは想像していなかったでしょう・・・夫は唇に微笑みをたたえて死んだかもしれません。生きている間に自分の理想に向かって行ったどんな活動よりも、自分が殺されることがもっと大きな影響を与えられると知っていたかもしれません。私は喜んで彼を生贄として捧げます。なぜなら彼の死そのものが、彼を殺した組織に対する最大限の抗議だと知っているからです<sup>81</sup>。

本稿で扱ったシーヒー・スケフィンソン夫妻やケトル、マクドナー、ピアースらに共通しているのは、皆がアイルランドの独立を切実に願い戦ったことだ。ただそれぞれに描く理想のアイルランド像とそれを得るための方法が異なっていたのである。スケフィンソンやケトルの死はそれまで数十年続いた合法的ナショナリズムの終わりを意味し

た。同じ年に処刑されたマクドナーら16人の死は数十年かけて自治運動がなし得なかったことを6日で成し遂げた。詩人の反乱とも呼ばれる彼らの死は、医学部をやめて独立戦争の兵士になった人物の言葉を借りれば「過去に戦って死んだ世代と結びつくような、何か不思議な感覚を人々に呼び起こした」<sup>82</sup>のだ。彼らは相反する立場に立つことになったけれども、数世紀にわたって求め続けたアイルランド独立のためにはどちらかだけでは十分ではなく、両方の運動が必要だったのであろう。最後に全く個人的な感想を述べて頂けるならば、一時期UCDで学んだ者の一人として、より良い国を作ろうと格闘したこの人々に敬意を表したい。

<sup>1</sup> 昨年度の『紀要』第24号128頁で取り上げた「パーシヴァル」はArthur Percivalとは別人である可能性が高いとマレー氏の家族から連絡がありましたのでここで訂正します。

<sup>2</sup> アイルランド社会において「ナショナリスト」とはアイルランドがイギリスから独立すること、または完全な自治権を獲得することを望む人を意味する。現在では南北アイルランドの統一を望む人の意味も含む。日本語で「ナショナリスト」という場合とはやや意味を異にする。

<sup>3</sup> スケフィンソンの生涯について代表的な伝記はLeah Levenson, *With Wooden Sword: A Portrait of Francis Sheehy Skeffington, Militant Pacifist*, (Northeastern University Press, Chicago, 1983).

<sup>4</sup> スケフィンソンの孫Micheline Sheehy Skeffington, 'The Sheehy Skeffington legacy and its influence on me today' in Ciara Boylan, Sarah-Anne Buckley and Pat Dolan (eds.), *Family Histories of the Irish Revolution*, (Four Courts Press, Dublin, 2018), pp.71-2.

<sup>5</sup> Francis Sheehy Skeffington, *Michael Davitt: revolutionary, agitator and labour leader*, (T. Fisher Unwin, London, 1908). 執筆のいきさつについてはCarla King, 'Revolutionary, Agitator and Labour Leader': Francis Sheehy Skeffington and Michael Davitt', in *Dublin Historical Record*, Vol.61, No.2 (Autumn 2008), pp.197-200.

<sup>6</sup> 代表的な伝記はMaria Luddy, *Hanna Sheehy Skeffington* (Dundalgan Press, Dundalk, 1995); Margaret Ward, *Hanna Sheehy Skeffington: A Life*, (Cork University Press, Cork, 1997).

<sup>7</sup> この政党の活動期間は1882年から1922年。

<sup>8</sup> Owen McGee, 'David Sheehy', 'Eugene Sheehy' in *Dictionary of Irish Biography*, (<https://doi.org/10.3318/dib.008026.v1>; <https://doi.org/10.3318/dib.008027.v1>最終閲覧日2022年11月22日、以下引用のアドレスについてすべて同じ)

<sup>9</sup> Micheline Sheehy Skeffington, *op. cit.*, pp.70-1.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p.71.

<sup>11</sup> マーガレット (生年1875) ユージーン (1882) リチャード (1884) メアリー (1884) キャサリン (1886)

<sup>12</sup> Eugene Sheehy, 'Memoires' in Ulick O'Connor (ed.), *The Joyce we knew*, (Mercier Press, Cork, 1967); Richard Ellman, *James Joyce*, (Oxford University Press, Oxford, 1983).

<sup>13</sup> 1954年以降アイルランド上院議員。教会により運営されていた国内各地の児童養護施設での虐待問題についての活動で知られる。Diarmuid Whelan, 'Peter Tyrrell's account of Letterfrack, war and exile: Sheehy Skeffington Papers, National Library of Ireland' in *Saothar*, Vol.31 (2006), pp.111-8; Peter Tyrrell, *Founded on Fear: Letterfrack Industrial School, War and Exile*, (Transworld Ireland, Dublin, 2008).

<sup>14</sup> Andrée D. Sheehy Skeffington, 'Reflections on the Reality of One of Joyce's Early Friendships' in *James Joyce Quarterly*, Vol.20, No.1, (Fall, 1982), p.113.

<sup>15</sup> Eilís Ní Dhuibhne, 'Family Values: The Sheehy Skeffington Papers in the National Library of Ireland', in *History Ireland*, Vol.10, No.1, (Spring, 2002), p.14.

<sup>16</sup> Micheline Sheehy Skeffington, *op. cit.*, p.69.

<sup>17</sup> Louise Ryan, 'The "Irish Citizen", 1912-1920' in *Saothar*, Vol.17 (1992), pp.105-111; Dana Hearne, 'The Irish Citizen 1914-1916: Nationalism, Feminism, and Militarism' in *The Canadian Journal of Irish Studies*, Vol.18, No.1, (July 1992), pp.1-14.

<sup>18</sup> 'For men and women equally the rights of citizenship, from men and women equally the duties of citizenship.'

<sup>19</sup> 1900年結成Inghinidhe na hÉireann、1914年結成Cumann na mBanなど。

<sup>20</sup> Maria Luddy, 'Hanna Sheehy Skeffington' in *Dictionary of Irish Biography*, (<https://doi.org/10.3318/dib.008106.v>).

<sup>21</sup> Roger McHugh, 'Thomas Kettle and Francis Sheehy Skeffington', in *University Review*, Vol.1, No.9 (Summer, 1956), p.14.

- <sup>22</sup> Francis Sheehy Skeffington, *A Forgotten Small Nationality: Ireland and the War*, (Donnelly Press, NY, 1917, originally published in *Century Magazine*, Feb. 1916), pp.5-6.
- <sup>23</sup> Eoin McNeill, 'The North Began' in *An Claidheamh Soluis*, (Nov.1, 1913).
- <sup>24</sup> 代表的な伝記はJ. B. Lyons, *The Enigma of Tom Kettle*, (Glendale Press, Dublin,1983).
- <sup>25</sup> Denis Gwynn, 'Thomas M. Kettle 1880-1916' in *Studies: An Irish Quarterly Review*, Vol.55, No.220, (Winter, 1966), p.385.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, p.388.筆者のグウィン (1893-1973) はケトルの授業を聞いた学生の一人。自身も一次大戦ではイギリス軍に入隊。後にジャーナリストとして活動。
- <sup>27</sup> McHugh, *op. cit.*, p.7
- <sup>28</sup> *Ibid.*, pp.9-15.
- <sup>29</sup> Eoin MacNeill and L. J. Kettle, 'The Manifesto of Irish Volunteers' in *The Irish Review*, Vol.4, No.40, (June, 1914), pp.169-170.
- <sup>30</sup> Niamh Reilly, 'The many sides of Tom Kettle' in Boylan, and Dolan (eds.), *op. cit.*, p.84.著者はケトルの親族。
- <sup>31</sup> Terence Denman, 'The Red Livery of Shame': The Campaign against Army Recruitment in Ireland, 1899-1914' in *Irish Historical Studies*, Vol.29, No.114, (Nov., 1994), pp.208-233; James McConnel, 'Fenians at Westminster: The Edwardian Irish Parliamentary Party and the Legacy of the New Departure' in *Irish Historical Studies*, Vol.34, No.133, (May, 2004), pp. 42-64.
- <sup>32</sup> McHugh, *op. cit.*, p.15.
- <sup>33</sup> 1913 Prisoners (Temporary Discharge for Ill-Health) Act
- <sup>34</sup> Francis Sheehy Skeffington, 'Open Letter to Thomas MacDonagh', *The Irish Citizen*, May 22, 1915.
- <sup>35</sup> Ed Mulhall, 'Shot like a dog: the murder of Francis Sheehy Skeffington and the search for truth' (<https://www.rte.ie/centuryireland/index.php/articles/shot-like-a-dog>).
- <sup>36</sup> Ronan McGreevy, 'John Redmond and the First World War' in *Studies: An Irish Quarterly Review*, Vol.107, No.428, (Winter, 2018-19), p.411.
- <sup>37</sup> Joseph E.A. Connell Jr., 'John Redmond's Woodenbridge Speech' in *History Ireland*, Vol.22, No.5, (Sep./Oct., 2014), p. 66.
- <sup>38</sup> *Ibid.*, p.66.
- <sup>39</sup> Francis Sheehy Skeffington, *A Forgotten*, pp.10-1.
- <sup>40</sup> J. B. Lyons, 'Tom Kettle, 1880-1916' in *Dublin Historical Record*, Vol.43, No. 2, (Autumn, 1990), p. 94.
- <sup>41</sup> Tom Kettle, 'I am fighting for Ireland', *The Freeman's Journal*, Jan.1915, (<https://www.rte.ie/centuryireland/index.php/articles/tom-kettle-i-am-fighting-or-ireland>).
- <sup>42</sup> *The Freeman's Journal*, Aug. 1915, quoted in BBC Voices 16 Project, 'Tom Kettle', (<https://www.bbc.co.uk/programmes/articles/2sPPFFnV46bMVPj7ShDY0pV/tom-kettle>).
- <sup>43</sup> W.B. Yeats, 'Easter 1916', in *The Collected Poems of W. B. Yeats*, (Palgrave, London, 1989).
- <sup>44</sup> Bob Purdie, 'With Wooden Sword: A Portrait of Francis Sheehy Skeffington, Militant Pacifist by Leah Levenson', in *Saothar*, Vol.11, (1986), p. 68.
- <sup>45</sup> Helena Molony, quoted in Ed Mulhall, *op. cit.*
- <sup>46</sup> Roger Webb, *Ibid.*
- <sup>47</sup> St John J. Ervine, *Ibid.*
- <sup>48</sup> Eileen Costello, *Ibid.*
- <sup>49</sup> Maud Joynt, *Ibid.*
- <sup>50</sup> Andrée D. Sheehy Skeffington, *op. cit.*, p.111.
- <sup>51</sup> 訳注：13世紀以降イギリスのアイルランド支配の拠点。
- <sup>52</sup> 訳注:1905年結党。大戦時、入隊反対運動を行っていた。組織としては蜂起に関係しなかったが、蜂起後勢力を急拡大し1918年の総選挙で大勝。英議会への参加を拒否してアイルランド議会(Dáil Éireann)を開いた。シン・フェイン党の台頭と同時に議会党は衰退、1922年に解党した。
- <sup>53</sup> Hanna Sheehy Skeffington, *British Militarism As I Have Known It*, (Donnelly Press, NY, 1917), pp.17-24.
- <sup>54</sup> James Quinn, 'Sir Francis Vane's Quest for Justice After Easter Week' in *History Ireland*, Vol.24, No.2 (MARCH/APRIL 2016), pp.38-40; Dara Redmond, 'Officer who exposed pacifist's murder', *The Irish Times*, Aug.26, 2006.
- <sup>55</sup> Norman MacKenzie, 'The Monk Gibbon Papers' in *The Canadian Journal of Irish Studies*, Vol.9, No.2, (Dec., 1983), pp.5-24.
- <sup>56</sup> Dara Redmond, *op. cit.* 著者のレッドモンドはトマス・マクドナーの孫。
- <sup>57</sup> Quinn, *op. cit.*, pp.40-1.
- <sup>58</sup> *Ibid.*; MacKenzie, *op. cit.*, p.8.
- <sup>59</sup> 詳しくは *Sinn Fein rebellion handbook, Easter 1916*, (1916, Dublin), pp.84-90.

- <sup>60</sup> Patrick Maume, 'John Bowen Colthurst' in *Dictionary of Irish Biography*, (<https://doi.org/10.3318/dib.001885.v1>).
- <sup>61</sup> *Royal Commission on the Arrest and Subsequent Treatment of Mr. Francis Sheehy Skeffington, Mr. Thomas Dickson, and Mr. Patrick James McIntyre, Report of Commission*, (London, 1916).
- <sup>62</sup> James W. Taylor, *Guilty but Insane: J.C. Bowen-Colthurst: Villain or Victim?* (Mercier Press, Cork, 2016).
- <sup>63</sup> 判決への疑問はたとえばBrenda Malone 'The Bullet in the Brick: the murder of Francis Sheehy Skeffington and the madness of Captain Bowen-Colthurst', Objects from the Historical Collections of the National Museum of Ireland, (<https://thebrickbatthatdiedforireland.com/author/bmalone2013/page/2/>). シーヒー・スケフィンソン夫妻の孫や他の被害者遺族たちは今でも自分たちの親族とヴェインに対してのイギリス政府の謝罪を求めている。(<https://www.irishtimes.com/news/ireland/irish-news/relatives-of-victims-of-bowen-colthurst-to-seek-apology-1.2630025>)
- <sup>64</sup> Conor Morrissey, 'Journalism: Scandal and Anti-Semitism in 1916: Thomas Dickson and "The Eye-Opener"' *History Ireland*, Vol.24, No.4, (JULY/AUGUST 2016), pp.30-33.
- <sup>65</sup> Tom and Mary Kettle, *The Ways of War* (1917), available at The Project Gutenberg eBook.
- <sup>66</sup> *Ibid.*
- <sup>67</sup> *The Freeman's Journal*, 23 Oct.1916, quoted in BBC Voices 16 Project. ドールトンは戦後アイルランドに戻るとイギリスからの独立戦争 (1919-21) に加わっている。独立戦争を指揮したマイケル・コリンズ (Michael Collins, 1890-1922) と親しく、コリンズが暗殺された瞬間に一緒にいたことでも知られる。後年には映画プロデューサーとして活躍した。
- <sup>68</sup> Tom Burke, 'In Memory of Lieutenant Tom Kettle, 'B' Company, 9th Royal Dublin Fusiliers' in *Dublin Historical Record*, Vol.57, No.2, (Autumn, 2004), pp. 164-73.
- <sup>69</sup> Tom and Mary Kettle, *op. cit.*
- <sup>70</sup> Tom and Mary Kettle, *op. cit.*
- <sup>71</sup> Tom Kettle, 'To my daughter Betty, The Gift of God' in *Ibid.*
- <sup>72</sup> Quoted in Lyons, *op. cit.*, p.95.
- <sup>73</sup> Ronan O'Brien, 'Thomas Kettle: The Lost Leader?' in *Studies: An Irish Quarterly Review*, Vol.104, No.414, (Summer 2015), p.176.
- <sup>74</sup> Lyons, *op. cit.*, p.97.
- <sup>75</sup> McGreevy, *op. cit.*, p.416.
- <sup>76</sup> Vivien Kelly, 'Irish Suffragettes at the Time of the Home Rule Crisis' in *History Ireland*, Vol.4, No.1 (Spring, 1996), p.38.
- <sup>77</sup> この条項は1973年に国民投票で廃止。
- <sup>78</sup> Joyce Padbury, 'A Mixture of Flattery and Insult' in *History Ireland*, Vol.26, No.3 (MAY/JUNE 2018), p. 38.
- <sup>79</sup> James S. Donnelly Jr., 'Big House Burnings in County Cork during the Irish Revolution, 1920-21' in *Éire-Ireland*, Volume 47, Nos. 3&4, (Fall/Winter 2012), pp. 146-7; Patrick Maume, 'John Bowen Colthurst' in *Dictionary of Irish Biography*, (<https://doi.org/10.3318/dib.001885.v1>).
- <sup>80</sup> Terence Dooley, *Burning the Big House: The Story of the Irish Country House in a Time of War and Revolution*, (Yale Univ. Press, New Haven, 2022).
- <sup>81</sup> Hanna Sheehy Skeffington, *op. cit.*, p.29.
- <sup>82</sup> Ernie O'Malley, *On Another Man's Wound: A Personal History of Ireland's War of Independence*, (Roberts Reinhart, Boulder, 1999, first published in 1936), p.44.

(本学非常勤講師)

